

Ⅱ 平成 30 年度の特筆すべき取組／令和元年度の計画

【平成 30 年度実績】

1. 「日本学国際共同大学院」国際会議の開催

No.07 ②-6 世界を牽引する高度な人材の養成

No.21 ①-3 国際的ネットワークの構築による国際共同研究等の推進

No.42 ①-3 グローバルネットワークの形成・展開

No.46 ③-1 国際通用性の向上

実績報告

日本学国際共同大学院では、2018 年 12 月 14 日-16 日、“The Meiji Restoration Revisited: Culture, Religion and the State”をテーマに国際会議を開催した。この会議では、ヨーロッパ、北米、アジアから参加した 20 名以上の研究者が日本学の各領域における種々の研究報告を行った。国際的な日本学の交流を通して、国際共同大学院の研究を国際水準に高めることが狙いであったが、報告の質の高さや討論の深さなどから、日本学のさらなる展開への確証が得られた。

2. 履修証明プログラム「臨床宗教学教養講座」の実施

No.06 ②-5 社会人の学び直しの支援

No.22 ②-1 経済・社会的課題に応える戦略的研究の推進

No.37 ①-1 東北大学復興アクションの着実な遂行

実績報告

超高齢多死社会を迎えている現代日本では、人々の死との向き合い方が大きな課題となっている。それは東日本大震災以降、いっそう切実さを増している。文学研究科ではかかる社会状況に鑑み、2012年度以降、宗教者を対象とした臨床宗教師研修を実施してきた。さらに、宗教者以外の市民、とりわけ医療福祉関係者からの心のケアにおける臨床に応用可能な知識を身につけたいという声の高まりを受け、2018年度より宗教学の基礎知識と死生学の臨床的知見を統合した「臨床宗教学教養講座」を実施した。本講座は、臨床宗教師と連携して地域包括ケアシステムを支える人材に、必要な知識を供給することができることから、地域や社会への貢献度が高いものと思われる。

3. 市民への知的資源の開放

No.35 ②-1 社会連携活動の全学的推進

No.36 ②-2 知縁コミュニティの創出・拡充への寄与

実績報告

文学研究科の独自の取り組みとして、知的資源の開放を目的に3つの市民向け公開講座を開催している。・有備館講座(大崎市、2005年～)・齋理蔵の講座(丸森町、2008年～)・メトロでカルチャー(川内南キャンパス、2015年～) 2018年度も、有備館講座(延べ193人)、齋理蔵の講座(延べ161人)、メトロでカルチャー(参加者65人)と多くの市民の参加を得、好評を博した。仙台市だけでなく、地元自治体の協力を得て、県北・県南でも継続的に講座を設けていることが特徴であり、地域からの期待も大きい。またオン・ラインでは、東北大学 MOOC <東北大学で学ぶ高度教養シリーズ>において、2018年度は「memento mori —死を想え—」を引き続き提供し、新たに「男と女の文化史」を開講した。前者には2,600人、後者には再開講分も合わせて7,300人の履修登録者があった。

4. 教育の国際化の促進

No.03 ②-2 大学院教育の充実

No.42 ①-3 グローバルネットワークの形成・展開

No.43 ②-1 外国人留学生の戦略的受入れと修学環境の整備

No.44 ②-2 本学学生の海外留学と国際体験の促進

実績報告

学生の国際交流の促進を図るため、受入れ・派遣の両面で独自の施策を実施している。受入れ面では「21世紀のシーボルト養成プログラム」「DEEp-Bridge」の長期受入れプログラムを実施しており、2018年度はそれぞれのプログラムで16人、14人の留学生を受け入れると共に、モスクワ大学からJSDプログラムで1名の学生を受け入れている。また短期受入れプログラムとして(一財)東北多文化アカデミーとの共催による日本文化研修プログラム、モスクワ国立大学心理学部短期受入プログラムを実施し、2018年度はそれぞれ31人、8人を受け入れた。派遣では文学研究科では留学の単位化を実施(2018年度の派遣学生数16人)しているほか、2018年度も引き続き日本学国際共同大学院プログラム及び研究科長裁量経費等による海外ワークショップ等への学生派遣(32人)を実施すると共に、国際交流基金「海外インターンシップ」プログラムへ参加し、6名の学生を派遣している。学生の国際交流以外では、2018年3月にアフリカ諸国(フランス語圏)との交流の可能性を探るためコートジボアールへ教員1名を派遣し、現地調査及び今後の交流の展望について協議を行った。